

実践報告

小学校における国際教育の実践
—青年海外協力隊員との交流を通して—阪井園子^a，諏訪英広^b^a兵庫教育大学大学院生 son-sakai@sch.ed.city.kobe.jp^b兵庫教育大学 hideosuwa@hyogo-u.ac.jp

要約：グローバル化する現代において、世界の人々と共に生きていく力の育成が急務である。筆者（阪井）は、これまで、海外派遣の経験から、国際教育に携わる中で、多様な価値観を持つ人々と協働しながら社会に貢献できる創造性豊かな人材を育成することの重要性を感じてきた。

令和2年度より、小学校では新学習指導要領が施行され、グローバル人材の養成を目指して、小学校英語が本格的に実施されることとなる。これまでも、国際理解教育が重視されているとは言い難い現場では、「国際理解教育は、英語だけで十分」、ともすれば「英語をすれば、国際理解教育をしている」となってしまうことが危惧される。しかし、国際理解教育とは、英語を学ぶことだけが重要なのではない。

そこで、本稿では、海外経験や、JICA や青年海外協力隊との繋がりを教育活動に活かした実践を報告する。

キーワード

国際教育

国際理解教育

JICA

青年海外協力隊

グリーティングカード

1. 問題の背景と発表の目的

豊かな日本に暮らす子供たちは、「井の中の蛙」のように、他者と最小限の関わりの中で、生きていけると思っているように感じられることがある。ニート、引きこもりといった他者との関係をうまく築くことができない人々に加え、自分さえよければという人々も増えている。しかし、日本のグローバル化が進み、国内にいても、外国人との関わりは避けられない現状がある。例えば、兵庫県教育委員会（2014）が作成した『ひょうご教育創造プラン』の「社会情勢の変化(4) グローバル化の進展」の中に、「グローバル化に伴い、異文化に対する理解や異文化との共存等の必要性も増している。本県には約10万人の外国人県民が在住し、県内の大学・短期大学、専修学校等に在籍する留学生数は10年前の2倍以上になるなど、着実に伸びている。他方、海外に留学した日本人は平成16年の約8万3千人をピークに減少傾向にあり、学生や研究者等若者の海外への関心が低下する、いわゆる「内向き志向」も指摘されている。このような状況の中、子どもたちにチャレンジ精神や創造性、コミュニケーション能力等、グローバル社会を生き抜くための力を身に付けさせ、さらに国際社会に活躍の場を広げていくことが課題となっている。また、国際社会に生きる日本人としての自覚をもたせるとともに、民族や国籍を異にする人々と互いに自他の文化や習慣、価値観を認め合い、共に生きる心を育成することが課題となっている（p.6）」とある。また、「基本方針1 自立して未来に挑戦する態度の育成」の中でも、「グローバル化に対応した教育の推進」として、「グローバル化が進行する社会において、子どもたちが、将来、国際社会で活躍できるよう、語学力やコミュニケーション能力を育むことはもとより、主体性や創造性、チャレンジ精神、リーダーシップ、異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティなどを培うことが重要である（p.28）」と述べられている。

文部科学省（2013）では、「グローバル化と言われる現代を生きる子どもたちにとって国際理解教育が重

要であることは論を待ちません。しかし、『国際理解教育』の名の下に行われる授業や活動には様々なものがあり、初期の目的を達成するためにどのような内容をどのような手法で取り上げるのが適切なのか、現在に至るまで試行錯誤が続いていると言っても決して大げさではありません。特に小学校においては平成 23 年度に外国語活動が正式に始まって以降、国際理解教育と外国語活動との関係を巡ってさらに模索が続いていると見ることもできます（巻頭言）。とある。

筆者は、A 市小学校教育研究会において、国際教育部で研究を行ってきた。平成 29 年度まで、「教科外の部」に位置付けられていた国際教育部は、英語活動を考えるグループと多文化共生グループに分かれて活動していた。しかし、平成 30 年度からは、「教科の部」に移動となり、外国語活動・国際教育部という名称に変更された。小学校英語の本格実施に向け、英語活動を考えるグループには多くの部員が所属しているが、多文化共生グループは非常に人数が少なく、存続が危ぶまれている。A 市小学校教育研究会国際教育部（2017）では、国際教育部のめざす資質および態度を以下の通り示している（p.2）。

- 1 コミュニケーション能力
- 2 さまざまな文化や伝統を尊重する資質
- 3 地球規模の問題を考えようとする態度
- 4 多様な価値観を受け入れる資質

世界をイメージすることが難しい小学生ではあるが、純粋で素直、偏見も少ない学童期に、世界の多様な文化や価値観に触れることは、将来必要なグローバルマインドを養うことにつながる。まずは、世界にはたくさんの国があり、たくさんの文化があることを知り、興味関心をもつことから始まると思われる。

そこで、本稿では、小学生と青年海外協力隊員との交流活動の実践を通して、国際教育の意義と課題を明らかにするために、実践報告を行う。

2. JICA とのつながり

筆者は、青年海外協力隊員として、2007 年 6 月から 2009 年 3 月まで、カンボジアに現職派遣されていた。現地の小学校で、子供たちや先生方に音楽・図工・体育を教えた 1 年 9 か月であった。この経験は、小学校教諭としての自分自身に大きく影響を与えた。よく耳にする言葉に、「開発途上国の子供たちの目の輝き」がある。どこの国でも子供は子供であるから、日本の子供たちの目が曇っているとは言いたくないが、学ぶ意欲には大きな開きを感じた。小学校への入学率は 90% を超えているものの、落第もあり、金銭面でも学び続けることができない子供たちがまだまだ多くいるカンボジア。学びたいという気持ちや学ぶことへの喜びが、子供たちの目に表れていた。

カンボジアで働きながらも、気にかかるのは、日本の子供たちの方であった。物や情報に溢れ、学ぶことは当たり前というよりも義務でさえある。過保護と思えるほどに守られ、心身共に弱くなっていると感じることが年々増えていた。子供たちが大人になった時、国際社会で力強く生き抜いていくことができるのだろうかと思いを馳せた。「生きる力」が叫ばれるようになって久しいが、現状は逆行していると思わざるを得ない。

帰国した筆者は、JICA が校区にある、A 市立 A 小学校へ赴任した。一方、青年海外協力隊兵庫県 OB 会で同志とも言える先輩 OB との関わりを深める中、会長職を頂くことになった。この県から世界中の開発途上国約 50 カ国に青年海外協力隊員として派遣されている青年は、約 100 名であった。青年海外協力隊兵庫県 OB 会では、毎年、この青年たちにグリーティングカードを郵送している。この封筒に、故郷の子供たちのカードも同封しようという取組が行われていた。子供たちから、途上国で活動している隊員へ直接「頑張ってください!」のメッセージが届けられる。このメッセージが、一人異国の地で生活している若者にとって、とても感動的なものとなっており、返信してくれる隊員も多くなったと聞いた。地球の反対側から、それも今まで聞いたこともなかった国から、自分宛の手紙を受け取り、クラスの中で共有することで、子供たちの世界観は一気に広がるであろう。子供

たちにとって、グローバルマインドを育み、将来、国際社会で活躍できる地球市民としての一歩としたいという思いから、勤務校でも取組を始めることとなった。

筆者自身、そして勤務校の JICA との結び付きから、この「グリーティングカードプロジェクト」は、3年生の総合的な学習の時間「Hello the World」に位置付けられ、8年間継続することができた。筆者が担任ではない時も、3年生の担任と連携を取って進めることができた。平成26年度、筆者はこの取組を中心に、A市小学校教育研究会国際教育部において研究授業を行った。3年生担任と共に、チームティーチングであった。

3. A市小学校教育研究会国際教育部 平成26年度の実践

「つなごう! 世界と!」Hello The World 「グリーティングカードプロジェクト」 ～手紙がつなぐ、世界とわたし～

(1) 国際教育部の取組

多文化共生を考えるグループでは、「つなごう! 世界と!」をテーマとして、国際教育について研究を重ねてきた。その中で大切にしてきたことは、子供たちが身近な暮らしの中から世界とつながることで、「多様な価値観を受け入れること」「様々な問題を、意識して解決しようと自ら努力すること」である。

平成26年度は、A小学校で5年間続けてきた3年生の総合的な学習「Hello The World」を取り上げて授業研究を行った。A小学校は、近くにJICAなどの国際協力を携わる施設があり、さらに元青年海外協力隊員がいることもあって、世界で働く青年海外協力隊員にグリーティングカードを送る活動を行ってきた。まずは手紙（グリーティングカード）という慣れ親しんだ伝達手段を使うが、さらなる交流が生まれれば様々な表現方法が広がると思われる。また、日本人である兵庫県出身の青年海外協力隊員とのつながりをきっかけに、さらに世界に目を向ける種まきとなればと考えながら、研究を進めた。

(2) グリーティングカードプロジェクトとは?

グリーティングカードプロジェクトの概要は以下の通りである。

- ・青年海外協力隊兵庫県OB会とのコラボレーションで行われる。OB会が主催しているグリーティングカードを送る活動に、参加させてもらう。
- ・海外に派遣されている青年海外協力隊員にグリーティングカードを送る。

(3) 学習指導案

第3学年 総合的な学習の時間 学習指導案

児童 31名 (男子15名 女子16名)

指導者 A市立A小学校 阪井 園子, 担任 A

1. 日時 平成26年11月18日(火) 第5校時(13:50~14:35)
2. 単元名 Hello The World 「グリーティングカードプロジェクト」
～手紙がつなぐ、世界とわたし～
3. 場所 3年1組教室
4. 単元の目標

世界の途上国で現在活動している青年海外協力隊員と手紙を介してつながることで、世界にはたくさんの国があり、世界で活躍している日本人がいることを知る。また、世界とつながる活動を通じて、子供たちの世界観を広げ、自分の町を見つめ直そうとする気持ちを育む。

5. 指導にあたって

本学級には明るく人懐こい性格の児童が多く、男女の仲もよい。国際理解に関わる学習としては、2年生で地球っ子プログラム「モンゴルの方との交流」や、兵庫県国際交流協会（HIA）主催「国際交流員文化交流イベント」で5ヶ国の方との交流を体験している。本校の近くには、HIAをはじめ、JICAやWHOなど、世界につながる施設がたくさんあり、生活科「町たんけん」でも学習している。また、「JICAでご飯食べたよ。」「外国の人に会ったよ。」などの話が児童から出ることもあり、日常生活でも世界を感じることできる恵まれた環境にある。しかし、それらは単独の経験となっているだけで、世界とつながろうとする気持ちは、まだ薄いと思われる。

本校では、このグリーティングカードプロジェクトを3年生の総合的な学習の中に、系統的に位置づけてから5年目となる。青年海外協力隊OGである筆者(平成19年、小学校教諭、カンボジア現職派遣)を通じてJICAから見せてもらう「兵庫県から派遣されている現隊員の名簿」を利用し、青年海外協力隊兵庫県OB会とコラボレーションすることで成り立っている活動である。このプロジェクトの利点として、青年海外協力隊員（日本人の大人である）を介することで、言葉の壁がなく、臨機応変に交流を進められることが挙げられる。さらに、各国について学ぶという異文化理解に加え、身近に世界で活躍している日本人がいることやその人々の思いを知ることが、児童の世界観を広げることにつながればと願っている。また、手紙やメール、場合によってはテレビ電話などの手段を使って情報収集、発信、交流する中で、コミュニケーション能力や表現力の高まりも期待できる取組である。

指導にあたっては、人と人(国と国)とのつながりを大切にしながら学習を進めていく。導入では、1学期末に、青年海外協力隊の活動目的や実際に活動している隊員の様子について話し、今も兵庫県からたくさんの方が世界で活躍していることを伝え、興味をもたせる(写真1)。そして青年海外協力隊員へ一人ひとりが手紙(グリーティングカード)を書き、一対一で関わろうとすることから活動を始める(写真2)。手紙を書くにあたっては、宛先となる国について世界地図や学習図鑑を使って調べさせるが、普段あまり耳にしたことのない国がほとんどで、どんな国か想像をふくらませることができる。本では情報が少ないため、現地で活動している人から返事が来て、その国の様子が伝わればさらに興味をもって今後の学習が広がっていくと考える。返事が返ってくる2学期後半には、一例として、教師の体験談を話したり、海外から届いた返事を読んだりする中で、さらに交流を深め、広げていく。返事が返ってくる確率は、例年2割程度である。世界の郵便事情について、身をもって知ることになるだろう。全員に返事が返ってこないからこそ、つながったその人々との関わりを大切にして交流を進めたい。相手とのつながりの中で、それぞれの国や人の個性が生かされ、多様な交流が期待される。未知との出会いを楽しみ、夢のある活動ができればと願っている。

相手国については、兵庫県から46カ国106名の青年海外協力隊員が派遣されているが、そのうち、A小学校は43カ国48名の方に手紙を書いた。その国は以下のとおりである。

インド、ウガンダ、ウズベキスタン、エクアドル、エチオピア、エルサルバドル、ガーナ、カンボジア、キルギス、グアテマラ、ケニア、コロンビア、ザンビア、ジブチ、ジャマイカ、スリランカ、セネガル、タイ、タンザニア、チュニジア、ドミニカ共和国、トンガ、ネパール、パプアニューギニア、パラグアイ、バングラデシュ、フィジー、ブータン、フィリピン、ベナン、ブラジル、ベリーズ、ボリビア、ホンジュラス、マラウイ、モルディブ、ラオス、モロッコ、モンゴル、ヨルダン、ルワンダ、中華人民共和国、南アフリカ共和国

6. 単元計画 (全8時間)

時期	次	時	内容	学習活動
7/9	1	1	「青年海外協力隊」とは? 知る	学年集会で、途上国で活動している青年海外協力隊について知る。
7/10 ~16	2	2	グリーティングカードを書こう。 書く	青年海外協力隊員に一人一人がグリーティングカードを書く。
11/10	3	3	体験談を聞こう。	学年集会で元青年海外協力隊員(筆者)の体

			聞く	験談を聞く。
11/18	4	4 本時	これからの学習について考えよう。 話し合う	海外から届いた返事を読んで、さらに知りたいことや、やってみたいことを出し合う。
11月 ～ 3学期	5	5～7	世界のことを調べたり、交流をしたりしよう。 交流する	・インターネット、メール ・テレビ電話(スカイプなど) ・本、資料 ・手紙や絵を交換など
3学期	6	8	ふりかえりをしよう。 分かち合う	学習をふりかえり、感想を書いたり、意見交換をしたりする。



写真 1. 青年海外協力隊とは



写真 2. グリーティングカードを書こう

7. 本時の目標

海外から届いた返事をきっかけにして、これからの交流方法を出し合う。

8. 本時の展開（第4次第1時）

児童の活動	指導上の留意点	評価
1. 海外から返事が届いたことを知る。	・前時のカンボジアを話題にし、手紙を書いた相手は今世界で働いていることを強調する。そして、海外から返事が届いたことを知らせ、児童の興味関心を高める。	○興味をもって、話を聞いている。(観察)
2. 届いた返事を読み、書いてあることを知る。 ・手紙 ・メール	・エクアドルのIさんから手紙をもらった児童を前に出し、どんな手紙かを確認させながら、ワクワクする気持ちを次の活動につなげられるようにする。 ・届いた封筒や写真を拡大して掲示し、内容を模造紙に書くことで、情報を共有し、またいつでも見られるようにする。 ・Google Earthで、その国を見せ、その手紙が長い道のり、時間をかけて届いたということを視覚的に分かりやすくする。また郵便事情などを伝え、届くことが当たり前ではなく、だからこそつながった相手を大切にしたいことを再確認する。	

	<ul style="list-style-type: none"> ・「現地の小学生が交流したい」というウガンダの川崎さんからのメールなどを、担任から紹介することで、返事が届いていない児童にも交流の可能性を与える。 	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">これからどんな交流をしたいかを考えよう。</div>		
<p>3. これからやってみたいことを出し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手紙，メール，電話，インターネット(スカイプなど) ・絵，習字，折紙などを送る ・DVD レター <p>4. 学習のふりかえりをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・手紙を出した相手だけではなく，その人を通して外国の人とも交流できることを確認する。 ・ワークシートを用意し個人だけでなく，グループで相談する場を与え，多様な意見が出るようにする。 ・意見が出にくいときには，遠く離れた家族や親戚とどのようにつながっているかを問いかける。 ・「やりたいこと」だけでは話がすすまない場合は，内容にも踏み込んで考えさせる。 ・問題点が出てきたら，端に板書する程度にとどめ，本時は考えをどんどん広げていく。 <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに，本時の感想を書く欄を，用意しておく。 ・児童が考えたことを，できるだけ実現できるようにすすめていこうと呼びかけ，これからの活動につなぐ。 	<p>○これからどんな交流をしたいか考えている。(発言，ワークシート)</p>

(4) 本時の振り返り1 —子供のコメントより—

- ・3年生であっても、「交流」だけではなく、「支援」という視点をもっていることが分かった。
- ・インターネットに家で親しんでいる子供たちがいることを想定していたが，やはり，スカイプなど，直接現地と結び付く交流方法が出てきた。

(5) 実践の振り返り2—研究協議会より—

実践の振り返りとして，次に実践後の研究協議会で出された意見等を掲載した上で，若干の考察を加える。

1) JICA や青年海外協力隊との関わりについて

- ・OB 会からの名簿を利用するので，JICA につながりがないとできない。どの学校でもできる活動ではない。しかし，筆者が3年生担任でない時も，他の3年生担任に委ねた状態で5年間続いてきた。名簿を入手しOB会で手紙を封入，発送してもらうことと，第1次と第3次は筆者が行った。
- ・手紙を出す相手や国が違うので，入り口は同じだが，クラスによって展開は変わってくる。
- ・スカイプなどのネットワークを利用する場合，JICA が近くにあるので，施設を使わせて頂くことも視野に入れている。
- ・相手は途上国なので，設備的，言語的に交流は本当にできるのか？
 - 電源は不安定な所もあるが，概ねインターネットなどは普及している。子供同士が交流する場合，時差は問題になってくるが，青年海外協力隊員は，自宅にインターネットを引いている人もいるので，時間の都合がつけやすいと思われる。青年海外協力隊員という日本人が間に立つので言葉の壁は緩和される。しかし，現地の児童に手紙を書く場合は，訳すのも大変なので，絵や習字などが中心になってくると思われる。
- ・JICA の現地での任期は2年（現職は1年9か月）。

2) 3年生で取り組んだこと、また系統性について

- ・3年生から、4～6年生に続かない。系統性がないのはもったいない。
- ・3年生が単独でするので良いと思う。6年生ではなかなか難しい。
- ・3年生は、地域学習から同心円状に社会が広がっていくので、早すぎる。高学年がふさわしい。
- ・2年生で「スーホの白い馬」と絡めモンゴルの話を聞くことが多いのだから、3年生でもおかしくない。
- ・高学年は行事が多く忙しい。「総合的な学習の時間」でとることも難しかった。高学年で行う場合は、もっと深いテーマが必要になる。3年生は、種まきであると考えられる。

3) 種まきで良いのか

- ・理解したり深めたりするのは3年生には難しいが、今後思い起こされることがあれば良い。早くもつながっていくものがある。3通しか返ってこなかった返事からも、平和の意味を考えられるのではないか。
- ・以前、風船をいっぱい飛ばすという活動があった。そういうやりっぱなしの活動ではなく、送り返してくれたというやりとりの中で、喜びや成果が得られるのではないか。
- ・失敗も経験として生きていく。
- ・現実的にうまくつながらなくても、その過程が大切だと考える。自分の生活が世界中で通用すると思っている子供が、そうではないと知るだけでも十分意義がある。本時で「支援」と書いた子供がいたことがすばらしい。将来、青年海外協力隊に参加する子がいるかもしれない。視野を広げることに意味がある。

4) 交流について

- ・例年している活動ではあるが、兵庫県からまた同じ国に派遣されるとは限らないので、その国との交流は一期一会である。
- ・本時は交流方法を考えていたが、もっと子供の気持ちを受け止め、何をしたいか(内容)を考えれば良かったのではないか。
- ・内容を考えていたら、もっとワクワク感があり、子供たちの笑顔もさらに見られたのではないか。

5) 本時について

- ・Google Earthを活用し、3年生でも距離感をつかめたのが良かった。
- ・Google Earthや実際に届いた手紙に対する、「おおっ。」という子供たちの反応が、素敵だった。
- ・「手紙が返ってきた子がうらやましい。」という子供の感想に、返事したくても書けない人がいる、というフォローが必要だ。郵便事情などの説明はあったが、返事が届いた子に拍手はしない方が良かった。
- ・手紙の提示を2人の先生が分担して提示したのは、子供の興味を引いて良かった。しかし、3分節目でもメールの拡大コピーなど、何か資料の提示が必要である。
- ・とても興味をもって授業に参加している子供が多かった。
- ・日本の子供たちは、「できないこと」に弱い傾向がある。成功体験も必要であるが、失敗することも無駄ではない。

6) 指導助言より

今回の取組と「国際教育部のめざす資質および態度」に関わって4点の指導助言を受けた。

① コミュニケーション能力

グリーティング(あいさつ)から人と人はつながる。会話や手紙を通して互いのことを伝え合うことができた。子供たちは、外国の人や外国で働く青年海外協力隊の人とどうつながろうかと考えていた。

② ささまざまな文化や伝統を尊重する態度

手紙、Web会議、写真、映像などから、多文化に触れることができた。日本のことを知らせようとする中で、自分たちの生活や文化をふり返る部分もあった。日本との違いや共通点も感じられた。

③ 地球規模の問題を考えようとする態度

貧困、飢餓、ゴミ山、物売りなど、同じ子供が置かれている境遇を知ること、「ふつう」と思っていることが、「ふつう」ではない世界があることを知ることができた。違う世界への気付きがあり、将来への種まきになっている。

④ 多様な価値観を受け入れる資質

郵便事情一つとってみても、日本のように当たり前が届くわけではない。マダガスカルとの文通では、半年経ってから返事が返ってきた。子供たちには様々な気付きがある。3年生での種まきを4～6年生でさらに積み上げることができればよい。

(6) 交流の例①—青年海外協力隊員とテレビ電話でつながろう—

1) 日時：2015年3月19日(木) 13:30～15:30

2) 場所：JICA 2階 ブリーフィングルーム

3) 参加者：南アフリカ M.Y(男)さん

ラオス F.S(女)さん

セネガル I.N(女)さん フィジー H.I(男)さん

A小学校 3-2(31名), 3-4(30名), 担任 2名, 筆者

JICA Mさん, Aさん, Nさん

4) 交流内容

14:00 Web会議システム開始

フィジー (17:00) より Hさん紹介 帰宅風景, 家からお出かけ中継 随時

14:05～14:45 3-4 メインの交流

南アフリカ (7:05) Mさん (13:45～14:30頃ご出勤)

* Mさんからの南アフリカ紹介

パワーポイント(任地・活動の紹介, 南アフリカの乗り物・食べ物・言葉・衣装・地方と都市)

・質問タイム

・子供たちによる出し物(写真3)

* MさんとFさんに向けて

→Mさんとさようなら。

ラオス (12:05) Fさんへバトンタッチ

* 外からの中継

・ラオス紹介

活動紹介：口頭で、病院についてなど

市場紹介：市場を歩いて、風景や実際に買い物

・質問タイム

・手紙をくれた子たちとのお話

(フィジーHさんの中継)

14:45～15:10 3-2 メインの交流

セネガル (5:45) Iさん不測の事態に備えて「学校&小学生のムービー」(JICAのパソコンで用意)

・(一緒にWeb会議が可能であれば)セネガル人(Iさん宅の大家さんの紹介)(写真4)

・食べ物：名物ごはん(できれば前日に現地の人に作ってもらったものを実際に食べてみせる), フルー



写真3. 子供たちから歌とダンスのプレゼントこう



写真4. 途中で大家さんが登場

ツ、飲み物

- ・服：西アフリカの布は鮮やかでいくつか種類がある
- ・人気スポーツ、音楽（最近の曲・楽器ジャンベ）
- ・質問タイム

15:10 繋がっている人全員であいさつ（児童代表の言葉）

15:20 Web 会議システム終了（各国で切って頂く）

(7) 交流の例②郵便でつながろう～マレーシアの方と～

郵便でつながった例として、マレーシアの隊員とのやり取りが挙げられる。(写真 5,6)

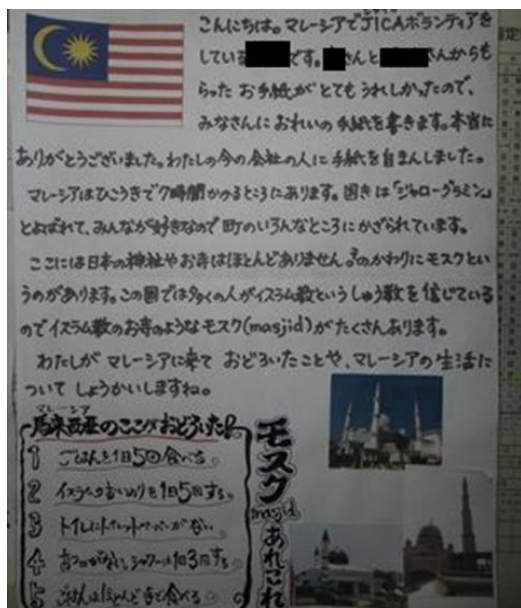


写真 5. マレーシアからの返事

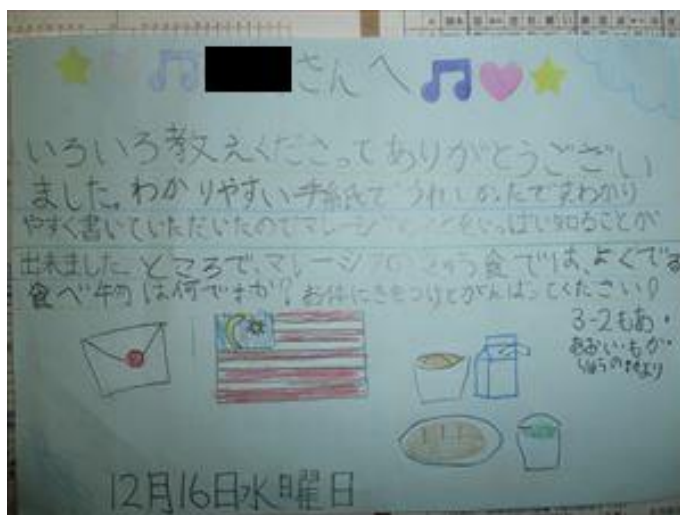


写真 6. マレーシアへの返事

4. 実践の成果と課題

(1) 成果

実践の成果は以下の通りである。

- ・翌年、4年生の教室でマララ・ユスフザイさんの話をしたとき、「去年、グリーティングカードプロジェクトで、パキスタンに手紙を送った。」と口にした子供がいた。心の中に体験として残っていることが分かった。
- ・子供たちと世界の途上国で今現在活動している青年海外協力隊員とが直接つながることは、子供たちに世界を身近に感じさせる効果的な方法であったと思われる。
- ・インターネットやテレビの情報ではなく、現実的な相手にグリーティングカードを書いて送ることによって、働く人や現地の様子について世界各国の生きた情報を得ることができた。
- ・現地と交流しても言語の壁が立ちはだかることが多いが、青年海外協力隊員という日本人を通すことで、自立的に交流方法を考えることができた。郵便、メール、Web 会議と、様々な方法を活かし、交流の幅が生まれた。特に、4か国同時に Web 会議を行ったことは、時差や国の様子、隊員の活動や性格なども知ることができ、正に顔の見える交流を行うことができた。

(2) 課題

実践及び研究の課題は以下の通りである。まず、実践の課題として以下3点を挙げるができる。

- ・転勤により、A 小学校の 3 年生において 8 年間続けた「グリーティングカードプロジェクト」を行うことができなくなった。
- ・どの学校でも、誰でも行えることではない。
- ・学校全体の中で、系統性をもたせることができなかった。

次に、研究の課題として以下 2 点を挙げるができる。

- ・児童の言動や文章から、教師の観察により気が付いたことしか、分析できていない。分析の手法について考える必要がある。
- ・データの取り方を工夫しなければ、客観性に欠ける結果となる。

謝辞

本実践において、JICA の皆様、青年海外協力隊兵庫県 OB 会、A 市小学校教育研究会国際教育部の皆様方から多大なご協力とご指導を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

参考文献

- A 市小学校教育研究会国際教育部 (2017) 国際教育部のまとめ『国際性豊かなこっぺっ子の育成』第 31 号.
- 佐藤郡衛 (2012) 『国際理解教育－多文化共生社会の学校づくり』明石書店.
- 田中治彦・三宅隆史・湯本浩之 (2016) 『SDGs と開発教育－持続可能な開発目標のための学び』学文社.
- 帝塚山学院大学国際理解研究所 (1995) 『国際理解教育論選集 I－学校教育篇』創友社.
- 帝塚山学院大学国際理解研究所 (1997) 『国際理解教育論選集 II－社会教育・学校外教育篇』創友社.
- 日本国際理解教育学会 (2011) 『グローバル時代の国際理解教育－実践と理論をつなぐ』明石書店.
- 日本国際理解教育学会 (2016) 『国際理解教育ハンドブック－グローバル・シティズンシップを育む』明石書店.
- 兵庫県教育委員会 (2014) 『第 2 期「ひょうご教育創造プラン (兵庫県教育基本計画)」(26～30 年度)』
http://www.hyogo-c.ed.jp/~kikaku-bo/kihonkeikaku/dai2ki_plan.pdf (最終アクセス 2019 年 11 月 4 日).
- 文部科学省 (2013) 『国際理解教育実践事例集－小学校編－』教育出版.